皆さん、こんにちは。

久留米大学附設高等学校、附設中学校にようこそ。多くの方々に支えられてきたからこそ皆さんは、今日、この場にいることができるわけですが、中でも、ずっと皆さんを見守って下さって来られたご家族の支えが一番大きかったのではないでしょうか。皆さんは、改めて、ご家族への感謝の気持ちを確かめましょう。ご列席のご家族の方々も、この入学式は、まだ、人生途中のほんの一歩とは言え、それなりに大きな一歩でもあり、ご感慨も一入かと存じます。本日は、本当におめでとうございました。

また、この場には、皆さんのお祝いのためにお忙しい中を、多くのご来賓にお出でいただきました。学校を代表して深くお礼申し上げます。後ほど、式次第にありますように、お祝辞を、神代正道学校法人久留米大学理事長、永田見生久留米大学学長、久留米大学附設高等学校同窓会長、附設中学校・高等学校後援会会長からいただきます。

さて、新入生の皆さんには改めて、この学校、以下、附設と申しますが、附設で学ぶということの意味を考えてほしいと思います。なぜ、皆さんは附設で学ぼうと考え、附設で学ぶためにそれなりの準備をし、そして、今、ここにいるのか。なぜなのか。できるだけ深い理由を考えてほしいと思います。進学実績？それも大事でしょう。しかし、それだけなら他にも学校はいくらでもあるし、塾や予備校もあります。それに、進学実績と言われても、人それぞれの段階では、ひと時のことで、本当の人生は、むしろ、その先にあります。

それでは、進学実績を支える雰囲気？塾との違いという意味では、これも無視できません。学校には代々の生徒たち、つまり、卒業生たちが作り上げてきた文化があります。社会で大活躍をしている先輩たちが過した頃の名残のようなものが留まっているかもしれません。ブランド価値のある大学に進むことは、人生の出発点での多少の有利さは確かに意味しているように見えます。しかし、個人のレベルでは、進学したということ自体に価値はなくて、実際、その後が大切なので、次々と起きるさまざまな新しいことを前にして励み続けることができなければ、寂しい人生になってしまうでしょう。

先ほど、わたくしは、皆さんに、なぜ附設で学ぼうと思ったのか、そのわけを深く考えてほしいと申しました。実は、今の段階で答えを出してもらうことは期待していません。附設で学ぼうと思った理由は何でもいいと思います。しかし、しばらくして、附設で学ぶと決めたことは思っていた以上にいいことだった、と感じてもらえればよくて、そのときに、なぜ、思っていた以上にいいことだったと感じることができるようになったのか、このことこそ、できるだけ深く考えてほしいと思います。

今年の高校の入学生は第六六回生、中学入学生は高校でいうと第六九回生に相当します。この学校は、今から六五年前、一九五〇年四月に、男子だけだったわけですが、最初の生徒を受け入れました。現在のキャンパスに移ってきたのが、一九六八年、その翌年に最初の中学生が入学しました。そして、今から一〇年前、二〇〇五年から、高校に女子生徒を受け入れ、一昨年、二〇一三年、新しい校舎の完成とともに、中学が共学化して、今日を迎えました。考えてみれば、附設はずいぶん変わって来たものだと思います。

学校の雰囲気というか、文化はどういう風に出来上がって行くものでしょうか。今、大きな節目というべき年代を四つ挙げました。つまり、今の久留米大学御井キャンパスに附設高校が創立された一九五〇年、今の野中への移転と中学創設の一九六八―一九六九年、高校女子受け入れの二〇〇五年、そして、中学共学化の二〇一三年です。いずれの時期も、関係者、つまり、生徒にとっても、教員にとっても、大きな冒険でした。

中でも創立後一〇年くらいまでは特に大変でした。今七〇過ぎの県立高校出身の方からは附設は滑り止めだったと聞いたことがありますが、だからこそ、最初の頃の先生たちが、よい生徒を確保するために、大変な苦労をされてきたことが想像されます。先日、文化勲章を受章された国武豊喜大先輩のお話からは、附設の先生たちが地元の中学校の成績優秀な生徒たちを呼び込もうと必死になって教育熱心なご家庭の間を走り回っていた姿が思い浮かびます。

ちなみに、一九五〇年から一九六〇年までというのは社会的にはどんな時期だったか振り返ってみますと、附設創立時の一九五〇年には日本はまだアメリカ軍の占領統治下にあり、一九五一年のサンフランシスコ講和条約を経て、一九五二年に主権を回復しました。一方、一九五〇年は、朝鮮戦争が勃発し、一九五三年の休戦協定成立まで続きます。一九五二年には、皇居前広場が血に染まったメーデー事件があり、遠隔地の高校生ではあっても、在籍中の一回生、二回生、三回生の皆さんは相当の衝撃を受けたはずです。

附設の校歌は、附設創立に当たって敗戦後の逼塞感を跳ね返そうという、板垣政参校長を始めとする創立時の先生たちの共通の想いが結実したものに他なりません。特に、「修羅道の世」や「平和の偉業」という言葉にはごく身近な実感が籠っていたことが察せられます。創立以来の六五年間の社会の変化は激しく、短い時間では到底述べきれませんが、今日までの附設の文化の芯というか根幹にあるのは、時代に合わせた読みかえを伴いながらも、校歌に籠められた創立者たちの想いであると言えましょう。しかし、附設は、前にも申し上げたように、今までも、野中に移った一九六八年、中学設置の一九六九年、そして、高校への女子生徒受入れ開始の二〇〇五年、中学共学化開始の二〇一三年と大きく変わってきました。このように変わってきた背後には、社会の変化があり、さらには、それぞれの時点での将来に

対する予想があったからでした。

学校案内などで、わたくしが述べている附設の建学の趣旨は、校歌よりも簡潔な表現

国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成

ですが、これは、実は、原巳冬校長が、附設高校二五周年誌において、板垣政参先生の創立の趣旨の文言を補う形で示されたもので、原先生によって「為他の気概」という重要な句が加えられています。キャンパスの移転や中学生の加入などに加えて、創立後四半世紀の間の社会の変化などを考えられたからだと思います。為他の気概、文字通りでは、他人のために尽くそう、働こうという強い気持ちということですが、建学の趣旨としては、これからの附設が育てて行くのは、公平で公正な社会の実現のために、公共のために、誠実に働こうとする人たちなのだという、強いメッセージが再確認されたことになります。

一九七〇年代、つまり、原先生の時代から、附設は、いわゆる全国レベルの進学校として世間に知られるようになりました。それは中学併設の効果が出て来たと考えられるわけですが、ともかく、そういう状況が続くと、丁度ここに集まっている皆さんのような、優秀な生徒が自然に附設を目指してくれるようになりました。他方、因果関係をきちんと説明することは難しいのですが、一九八〇年代の半ば、昭和という時代の終わり頃から急速に進んだ首都圏への集中と地方の空洞化、昭和の終わりとともに起きたバブルの崩壊、さらに、それ以前から続いていた少子化など、その後、いろいろと曲折があって、今世紀に入ってから、附設も、高校の共学化、中学の共学化と学校の構造が変わってきました。

最初の方で、皆さんには、附設で学ぶと決めたことは思っていた以上にいいことだった、と感じてもらえればよくて、そのときに、なぜ、思っていた以上にいいことだったと感じることができるようになったのか、このことこそ、できるだけ深く考えてほしいと言いました。ところで、ここまで述べてきたように、社会の大きな変動の影響を受けて、附設は、今、変革期にあります。附設としては、社会的な変化について、それに引きずられる形でやむを得ず変わって行くというのではなくて、積極的な機会として、学校としての理想実現によりふさわしい形に変身しようとしているつもりです。皆さんも、実は、附設で学ぶということはどういうことか、附設の伝統の本質的なこと、将来にわたって守っていくべきこと、そういうことを自分たちの課題として考えていかなければならない立場にあります。この課題は、皆さんが附設で学ぶと決めたときには、全く意識してはいなかったのではないでしょうか。しかし、後で、附設で学んでよかったと振り返ることができるとすれば、そのときには、変革期の経験が最初に思い浮かぶようであってほしいと思います。

わたくしが附設に来た頃、六年前ですが、生徒会の交替に合わせて新旧のメンバーと何時間か話し込んだことがあります。自分たちは一六年か一七年しか生きていないので、親や先生の言うことがおかしいとは思っても、どこがおかしいかうまく説明できない、と何人かが言ったことに強い印象を覚えました。実に正直で、自由で、頭がよくて、しかも、冷静な子が揃っているものだ、と思いました。このかれらの感覚ですが、これは少年の直感というべきもので、実は、皆さんにも大事にしてほしいと思います。

つまり、親や先生は大人ですから、どうしても、自分たちが仕切っている今という時代や、自分たちの年齢や経験でものを言ってしまいます。しかし、生徒たちが社会を仕切るようになる時代は、親たちが仕切っている今とは違います。今から十年先、二十年先からが、かれら生徒たちの時代になります。今を基準にしてものを考えていいのだろうか、という少年たちの直感は、本当は、われわれ大人たちも持ち合わせなければならないものではないか、と思います。

われわれ大人は、大人にとっての今という感覚を基準にして、子供たちにものを言い過ぎてはいないだろうか。言いかたにも工夫が要るのではないだろうか。子供たちがこれから本当に気を付けなければならないことについて心配しているだろうか。大人の方では、そう改めて考えなければならないのではないでしょうか。一方、生徒の皆さんが、大人の言うことに全く疑問を感じないようでは、余りにも情けなさすぎます。

もちろん、わたくしは、大人と子供が喧嘩をすることを勧めているわけではありません。何十年か経ったときの情景、つまり、期待以上の活躍をしている子供たちの姿を引退後の気楽な立場のわれわれ大人が悠然と見守っているという、そういう情景を想像したいわけです。それではお互いどうしたらいいのか。もちろん、生徒諸君には、今、この時期でなければ、つまり、中学なり高校なりの時期でなければ、身につけられないことがあります。これらは、しっかりと身につけなければなりません。しかし、それだけでは安心することはできません。ここまでは、飽くまでも基本のこと、基礎のことです。そういう基礎・基本をどう活かそうとするのか、そこが大事なところです。自分の頭で考える、考え直す、という形で、身につけたことを反芻しなければなりません。大人の方からは、生徒たちに、頭は固くなっていないか、自由にものを考えているか、と注意をしていかなければならないでしょう。

実際、先ほども言ったように、生徒の皆さんが社会を仕切る、あるいは、むしろ、新しい社会、新しい世界を作って行くことになるのは、今から一〇年以上も先のことになります。そのときに世界中の同じ世代の人たちと一緒になって立派な仕事をすることが大切です。しかし、そのための条件が一体どうなっているのか、想像を超えていると思います。わかっていることは、どんな仕事に就こうと、国内にずっといようと、国外で働こうと、このことは

変わらないということだけです。それなら、どこにいても、どういうことが起きても、通用する力を身につければいいわけですが、しかし、その力が何であるか先のことですから、あらかじめ決められません。とすれば、何よりも自由で柔軟な姿勢を養わなければなりません。自分を信じる力、自由にものを見る力、そういったものを基礎にして筋道立てて、素直に、自由に、ものを考える力、そして、自由に行動する力、こういう力が絶対に欠かせません。

われわれ大人としてできることは、生徒たちが安易に出来合いの知識や技能の習得だけで満足してしまわないように刺激し続けることでしょう。例えば、君、それは思い込みではないか、本当にそれでいいのか、もっと先まで行けそうなのにどうしてここで止めちゃうの、とか、君にはまだ半分も見えていないのではないか、他の場合も調べてみたかとか、どんなことでもいいのですが、生徒たちを立ち止まらせないことが必要だろうと思います。少なくとも、われわれ大人は、もしかしたら時代の変化の一歩先を行ってくれるかもしれない少年少女たちの邪魔はすべきではないと思います。いずれにしても、今日、入学式を迎えた皆さんが、これからどんな風に変身してくれるか、大化けするというか、脱皮して、そして、どんな世界を作ってくれるのか、わたくしは興味津々です。三年後、あるいは、六年後に、将来に大きな期待を持たせてくれるような青年に変身しているだろうことは強く信じています。そして、もっと経ってから、あのとき附設で学んでよかった、自分たちが、附設の伝統、附設の文化にさらに厚みを加えることができて本当によかったと感じるだろうことも、実は、信じています。

改めて建学の趣旨に戻りますと、附設は

国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成

を目指してきました。今後も変わりません。しかし、これだけ附設を巡る環境が変化し、附設自身が変わってきているとき、板垣先生や原先生の時代と同じ解釈でいいのだろうか、と思っても不思議ではないでしょう。

これからの時代、皆さんは否応なしに世界と関わります。先ほど言ったように、日本の中だけで仕事をするのでも、その仕事の原因や結果は世界中のあらゆるところに関係があります。つまり、皆さんは、否応なしに、新しい世界を作りあげる役割を担っています。その世界が、公平で公正な世界であるように作り上げていくのが皆さんなのだ、という風に、この建学の趣旨は読めると思いますし、ぜひ、そう読んでほしい。もちろん、そういう新しい世界を作り上げる人たちは、皆さんだけではないし、実際、世界中の人たちの務めではありましょう。しかし、できれば、そういう中で、世界中の人たちと協力しながらも、皆さんには少しでも指導的な役割を果たしてほしい、という願いを籠めて、そのための基礎をこの附設

で築いてください、という風に、建学の趣旨の今日の時代にあった解釈はなると思います。

以上、要するに、皆さんは、何と、皆さんの存在そのものが世界史の流れに棹さしているのだという自覚を抱いてほしい、という、附設に関わった先人たちや今のわたくしたちの想いを籠めて、この式辞を終えることにします。

本日は、入学式、おめでとうございました。

平成二七年四月八日

久留米大学附設中学校・高等学校　校長

吉　川　　敦